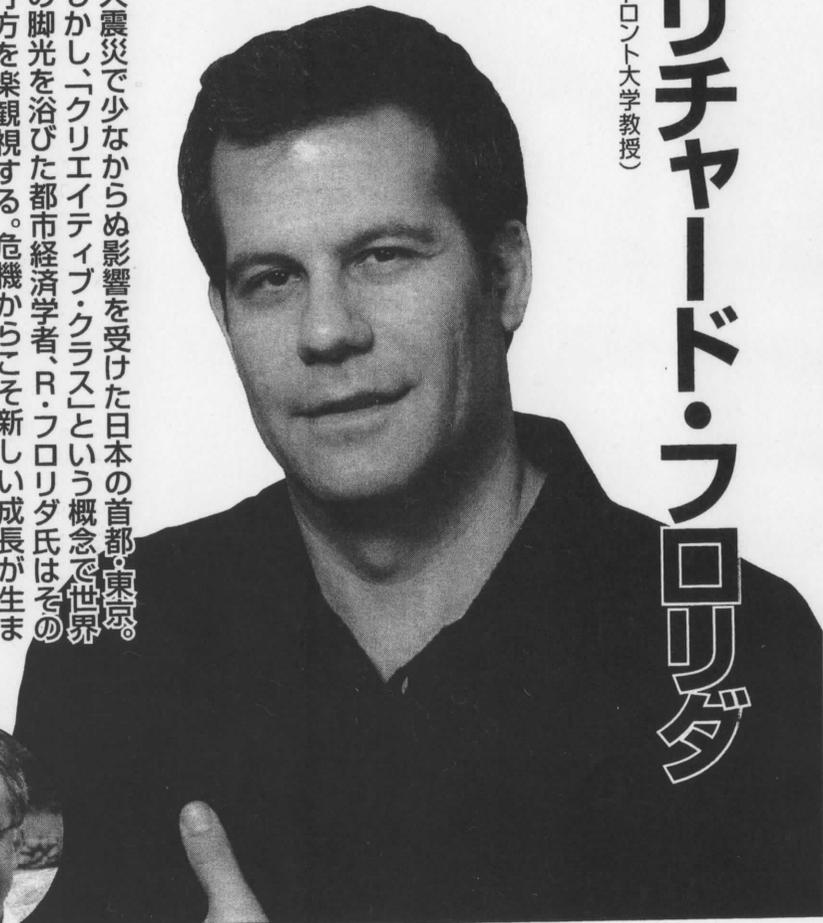


東京はこれからも 世界で輝き続ける

リチャード・フロリダ
(トロント大学教授)

大震災で少なからぬ影響を受けた日本の首都・東京。しかし、「クリエイティブ・クラス」という概念で世界の脚光を浴びた都市経済学者、R・フロリダ氏はその行方を楽観視する。危機からこそ新しい成長が生まれるという「グレート・リセット」論の真意とは！



「聞き手」
おの かずもと
大野和基
(国際ジャーナリスト)

いて、何をお感じになりますか？

フロリダ 今回の巨大地震、さらに発生した津波という悲劇について、心からお悔やみ申しあげたいと思います。しかし日本人は立ち直りが早く、強靱な回復力がある。この大きなチャレンジを、時間の経過とともに必ず克服できると信じています。

—— これからも東京は、国際的に魅力ある都市であり続けられるでしょうか。

フロリダ 東京には国際的にみて短所もありますが、それでも最も強力なグローバル経済の拠点の一つであり続けると信じています。首都圏は集中したかたちで、アウトプットおよびイノベーションの面で世界経済をリードするでしょう。これからもクリエイティブでイノベーター的な人たちにとって、魅力的な地域であり続けると思います。

—— 『グレート・リセット』では、イノベーションは大恐慌から生まれる、と議論されています。もしかすると現在の日本にも重ねられる議論かもしれません。「グレート・リセット」の基本概念のご説明をいただけますか。

フロリダ 危機や不況、パニック、金融ショックなどについてのみならず議論します。しかし、その危機がどのように新しい成長を生み出すかについての議論が十分になされていません。一九二〇年代の大恐慌、一八七〇年代の長期間の不況と比較しながら歴史文献を読むと、恐慌や失業

リチャード・フロリダ氏はいま、世界で最も注目される都市経済学者である。彼は、経済成長の担い手として、科学者、エンジニア、建築家、デザイナー、教育者、アーティスト、ミュージシャン、さらにはビジネス、金融、法律、医療などの分野で、独自の判断に基づいて複雑な問題解決に取り組む知識労働者を「クリエイティブ・クラス」と呼んだ。

先日、日本でも発売された『グレート・リセット』（早川書房）はその議論の延長上にあるが、歴史的分析を踏まえて、さらに説得力あるものになっている。かつて私は、アメリカのジョージメイソン大学で彼にインタビューしたことがある。それから四年、再びインタビューのため、私はトロントに飛んだ。

世界経済を襲ったリーマン・ショックはかつての大恐慌と似ているようで、じつは似ていない。人びとはそれを危機と呼ぶが、フロリダ氏はその危機によってこそ大きなリセットが生じ、新しいイノベーションが生まれる契機になると説く。その真意を聞いた。

危機がどのように新しい成長を生み出すか

—— まず、今回日本を襲った史上最大級の地震被害につ

に加え、危機の一つの局面がイノベーションの波であることがわかります。ヨーゼフ・シュンペーターはこのことを論文で指摘しました。曰く、「このような危機はクリエイティブな破壊の時期につながる」と。カール・マルクスも彼なりの理論で同じことを指摘しています。

特許とイノベーションの研究を調べると、過去二回の危機は、この二世紀において最も顕著なイノベーションの時期でした。さらに重要なことは、これはたんに個人のイノベーションに留まらない、ということでした。トーマス・ヒューズの研究をみればわかるように、広範囲なイノベーションのシステムが起るからです。またジョン・メイナード・ケインズが指摘したように、先進国では不況から脱出できる財政行動を行なう契機にもなる、と考えています。

それら新しいインフラの構築に加えて、まったく新しい生活様式が出てくるだろう、と私は考えました。デヴィッド・ハーヴェイの研究に基づき、それをthe spatial fix (空間的固定)と呼んでいます。つまり、そこでは個人のイノベーション、広範囲なイノベーションのシステム、新しいインフラの構築、新しい文化の出現、新しい生活様式などの要素が一体でやってくる。いまわれわれは、その移行の真っただ中にいます。

——具体的にはどういふイノベーションが起こりますか。フロリダ 多くの人がいま、われわれはもうイノベーション

もちろん一方でアメリカは、世界にとって科学と技術面で才能ある人の大きな集積国であり続けます。われわれが知っているすべての理由で、アメリカはオープンな国であるからです。大きな問題は、そのインフラを提供する、新しいイノベーションのシステムが何であるか、ということだと思います。パイオカ、次世代の情報テクノロジーか、それともソーシャル・メディアか。私の勤めでは、それはたんなるエネルギー効率やグリーン・エネルギーではなく、新しい生活様式のインフラではないか、と思うのですが。

二十一世紀型のステータスとは

——生活様式といえば著書で「クルマ離れ」について論及があります。それはアメリカだけではなく、他国でも起こる現象でしょうか。

フロリダ 日本についてはあなたのほうがよく知っているでしょう。日本は部分的に世界をリードしています。アメリカでzip carと呼ばれる、クルマのシェアが広まりつつありますが、日本ではアメリカよりかなり早くから「クルマに依存した生活はしたくない」と考える若者が増えました。日本のほうが明らかに交通システムのインフラで優れているからです。先進国では日本、そしてヨーロッパがそのような傾向を鮮明にするでしょう。シリコンバレー

ンを使い果たした、と主張します。たとえば『ビジネス・ウィーク』の辣腕記者であるマイク・マンデルがそうでしょう。“The Great Stagnation”を上梓したタイラー・コーエンも、先進国でいるわれわれはhave taken the low-hanging fruit of innovation (すぐに実現できるようなレベルのイノベーションを目標にした)、と主張していますが、そうは思いません。歴史の終焉でもないかぎり、大学の研究室だけではなく、より多くの人が会社のイノベーションや新興企業にもかかわってくるからです。

危機の際、まずわれわれはeasy money (楽に手に入るお金)の観点からモノを考えはじめます。すなわち、投機、インターネット株、株式市場、デリバティブ、不動産投機のようなものです。そのあと、人びとは实体经济に頼るようになる。これこそが行動のシフトです。これから起こることは、实体经济のなかでイノベーションにトライアルするだろう、ということでした。

かつて、イノベーションの中心はアメリカでした。少なくともアメリカ人はそう考えていた。しかし、いまではイノベーションはもっと分散されています。アメリカの特許の半分は、アメリカ以外で生まれた外国人か、外国に住んでいる発明者のものです。世界がもっと広くなったということ。そこでアメリカの相対的な役割はある程度、縮小せざるをえません。

——の小さな会社であるテスラ・モーターズの電気自動車は、いま、トヨタの工場で作られていますが、こういう試みは日本にとっても有益なことだと思いませんか。

——新興国ではどうなりますか？

フロリダ 彼らはクルマを買うでしょう。そこには大きな市場があるからです。しかし、それは環境汚染を悪化させる問題を提起します。重要なことは、古いフォードイズム(大量生産、大量消費を可能にした生産システムのモデル)はアメリカがパイオニアですが、トヨタがそれを根本的に発達させた、ということ。労働者のマインドを集中させる生産方法のやり方で、トヨタ以外にも日産、松下(現・パナソニック)、ソニー、富士通など、一九八〇年代に私が研究した会社がその担い手でした。しばらくはこの日本スタイルの資本主義がフォードイズムに取って代わる、そう私は考えていました。

しかしいま目の前で起っているのは、もっと大きなブレイク(変わり目)です。フォードイズムが限界に達するにつれ、新しい生活様式が出てくるのではないのでしょうか。もっと知識経済に同調するような経済を組織化する、新しい方法を見つけねばならない。

言葉を換えれば今回の危機は、フォードイズムの終焉です。変化には二十―三十年が必要かもしれませんが、もつと高度な、新しい資本主義のモデルが現われるでしょう。

問題は、どの国が先手を打つかです。先手を打った国が長期的にみて、非常に大きな競争的優位に立ちます。

——そのリセットにおいて、日本はどのような位置づけになるのでしょうか。

フロリダ 日本は非常に興味深いケース・スタディーになります。スペース的に日本はかなりコンパクトで、一つの大きなメガ地域であるからです。しかも組織化された社会で、非常に効率が良い。それは新しい住宅の技術開発にかなり貢献するでしょう。いまよりもっと効率のよい、グリーン・テクノロジーを使った住宅です。ハイブリッド車と電気自動車の普及の裏返し側面です。もちろん、アメリカのオープンさと違い、日本が比較的均質な社会であることは、その制限要素になります。

——やはりすべてのキーワードは「価値観の転換」ですね。本のなかでもハーバード大学の卒業生の進路が、金融から医療・バイオなどに移っていると論じられています。フロリダ イタリアのマルクス主義思想家であるアントニオ・グラムシは、「ヘゲモニーは工場から生まれる(Hegemony is born on the factory floor.)」と刑務所から喝破しましたが、これほど正鵠を射た表現はありません。彼がいたかったのは、どの社会でも、価値観の転換は新しい生産様式からくる、ということ。つまり新しい価値観は、新しい経済秩序を踏まえて形成されるのです。

ただ中ですが、価値観は急速に変化しています。

勃興しつつあるグローバル・シティ

——具体的な都市についてうかがいたいのですが、リマン・ショックは大きな傷跡を残したとはいえ、ニューヨークの傷は浅かった、と述べられています。

フロリダ いまニューヨークは世界で最も重要な都市として姿を現わし、ロンドンや東京を大きく引き離しています。危機後の回復はかなり早かった。それは不動産価格からも明らかです。デトロイト、クリーブランドなど他の都市は大きく打撃を受けましたが、ニューヨークはその重要性から打撃の度合いは少なかった。ニューヨークは混雑して物価も高いと人びとはいいますが、そのアドバンテージはさらに広がっています。つまりわれわれは世界をさらに不平等にするという点で、リマン・ショックのインパクトを過小評価してしまった。いま起こっているのはグローバル・シティの勃興です。ニューヨーク、その次にロンドン。他の都市もある程度はグローバルですが、この二都市は構成をみても真の意味でグローバル。グローバルな野心、起業、才能の中心になっていくのです。

——なぜニューヨークはそれほど強いのでしょうか。フロリダ 地理的にいえば、スペース的な分業ができて

資本主義はさらに効率がよくなっています。製造部門でもこれまで、かなりの無駄を省いてきました。農業でもしかり。いま残っているものは何でしょうか。サービス部門です。たとえば一日のうち、一部の時間しか使わないビル。一人一台のクルマを使う通勤。このような生活の仕方は非効率でかつ、無駄が多い。資本主義の将来は、才能をより生産的に使い、人をチームに関わらせて協力し合い、イノベーションを生み出せるかという点にかかっています。そしてそれが起こりはじめると、われわれの価値観も変化しはじめる。「いまもっているクルマは気に入らない。マクマンション(周囲の景観に調和しない豪邸)はほしくないので、もっと狭い場所がいい」となるのです。

大きな希望の一つは、人びとはプリウスをより好んでいることです。ハマーよりもプリウスのほうがいい、といっているわけです。ニューヨークに住んでいる人は、「アパートは小さいが、キッチンも気に入っていて、冷蔵庫もエネルギー効率がいい。アートの入っていることがステータスになりつつある。百三十五㎡は日本の基準からいえば広いかもしれませんが、アメリカでは狭い。しかし、カンザスのばかでない家よりもはるかにいい。

つまりはどこに住んでいるかということよりも、どういう環境で暮らしているかということがステータスになり、自分のアイデンティティになる。いまはまだ変化の真つ

いるからでしょう。いま世界の大都市で、この分業が進んでいます。それぞれの都市がニッチと能力を開発しているのです。ニューヨークとロンドンは世界中から才能のある人を集めています。成功した人たちです。そしてこの状態をつくっているのが、オープンであることです。

メディアへのアクセス、コミュニケーション手段へのアクセス、すべてが近くにある近接性からイノベーションが生まれます。ニューヨークが高級レストランや、バーや楽しいナイトライフを提供するという理由だけではなく、そこにある新しい生産様式こそが、世界中から富を収斂させるのです。おそらく今後、アメリカは日本のようになるでしょう。東京は日本において圧倒的に支配的な都市です。それと同じように、アメリカではニューヨークが圧倒的に支配的になる、ということ。——ニューヨークはあなたがいう「クリエイティブな都市」の要件にもかなう、と。

フロリダ その要件とは、テクノロジー(Technology)、才能(Talent)、そして寛容性(Tolerance)です。なかでもトップに立つ都市、そうではない都市の違いは寛容性にあるといっています。それがあってこそ、世界中から最精鋭の人材を惹きつけることができます。ニューヨークの寛容性は特筆すべきものです。逆に日本は三つ目のT、つまり寛容性をアウトソーシングすることで、巧みにその変化に順

応しました(笑)。金融のようにグローバル・タレントが集まる必要のある分野で、ニューヨーク、ロンドン、香港に支店を置いて、多くのグローバル・タレントを採用したのです。そういう人が東京にいないといっているのではありません。少なくともなっているといふことです。

——本のなかでは「グーグルが引き合いに出されています。クリエイティブな都市を牽引するのは、優れたサービス業しかありえないのでしょうか。」

フロリダ サービス業に関する私の基本的なモデルは単純です。先にも述べましたが、最初に農業、次に製造が効率化され、最後に残っているのがサービス部門だということとです。サービス部門の労働者をもっと仕事に巻き込めば、生産性が高くなり、給料も上がるでしょう。アメリカは最先端のマーケットにおいて、その一端を担う方法を考えました。それが「グーグル」であり、「フェイスブック」です。

しかし、まだ誰も考え出していないことは、かつてトヨタが工場労働者に対して行なったことを、ルーティンのサービス労働者に対して実施する方法です。アメリカでは六千六百万人がルーティンのサービス業に従事していて、それは労働人口の四五%に相当します。そしてその仕事は非効率そのものといつてよい。

——日本は製造業に強みをもっていますが、それはクリエイティブな都市をつくりだす牽引力になりませんか。

ている都市では東京。しかしこれらのどの都市も、これらすべての要素を併せ持つてはいません。

——やはり東京の欠点は、オープンさの欠如でしょうか。フロリダ 冒頭にも言及したとおり、東京は、世界のなかでもクリエイティブな都市です。食べ物、テクノロジ、新しいビジネスモデルという点で、きわめて優秀でしょう。ただ、やはり同質性が強すぎる。それがオープンさの欠如にもつながっているのです。その欠如のために、東京はかなり損をしています。あまり声を大にしていいたくはありませんが、優れた人材を集めるために、英語は非常に重要な要素なのです。

——その均質性を逆手にとる方法がありますか。

フロリダ 均質性は「フォーカス(集中)」をつくりだします。集団的行動を生み出し、それがトヨタなどの強みにつながり、日本企業の成功が導かれました。私はいま靴メーカーである「ザッポス」の創設者、トニー・シエーと連携して研究を進めています。彼らがやっているのはまるで、トヨタの改作版です。トヨタはユニフォームを着せますが、ザッポスは髪を剃って、おかしな髪形をさせることで意識を統一させます。高い給料を払うだけでなく、目的意識も与えているのです。それ一つとっても均質性が重要であることが理解できるでしょう。

——言語の障壁はどう乗り越えるべきでしょうか。

フロリダ もちろん製造業は重要です。ときどき誤解されますが、製造業をクリエイティブにしない企業に未来はありません。しかし、もはやそれだけでは経済の牽引力にはならないのです。全体からみれば、あくまでそれは一部分にすぎない。アメリカでも労働人口でみれば、製造業は全体の10%。繰り返しになりますが、われわれは人間の可能性を活かし、無駄をなくすために、製造業で使ったアプローチをサービス業でも活用しなければなりません。

もはや英語こそが世界の中心である

——では、そのようなサービス業が引つ張る二十一世紀型の「クリエイティブな都市」はどのような姿になるのでしょうか。モデル都市はありますか。

フロリダ いまそれに向けて成長しつつある都市はありますが、次に出てくる生活様式を踏まえたモデル都市はまだありません。先に述べたとおり、おそらくその変化には数十年が必要とされるでしょう。オープンな都市という意味ではニューヨーク、テクノロジという点でみればシリコンバレー。ロンドンもある程度は該当しますが、スタイルが異なります。もっと小さな都市でいえば、トロント、バンクーバー、シドニー、メルボルン。音楽のタレントを集めた都市ではナッシュビル。スペースを効率的に使っ

フロリダ 生産性、効率、競争力などにおいても強力な国は北欧諸国ですが、彼らは完璧な英語を話していません。もはや英語こそが世界の中心であることは疑いようがありません。すべてのグローバル・タレントは英語を話します。カナダに住んでいるアメリカ人としていえば、それが現実なのです。だからこそ、英語が通じない都市はどうしても魅力に欠ける。こうやってはつきりいふのは決まりが悪いです。

——日本の都市を世界基準にするには、強力なリーダーシップも必要とされるでしょう。四月には東京都知事選が実施されます。

フロリダ 危機のときには強力なリーダーシップが欠かれません。それはアメリカでも同じ。ティー・パーティーによって、政治が機能しなくなっているのです。しかしアメリカの場合、どれほどワシントンが機能しなくとも、他の州の知事が変化をもたらしてくれる。

もはや巨大な猛獣をトップに置いて、国を運営することは大きな間違いでしょう。現在の知識経済において、政治権力を地方に分散させることは巨大な「ビヒモス(聖書『ヨブ記』に登場するカバに似た巨獣)を中心に置くよりもはるかに合理的です。これを連邦主義と呼んでいます。アメリカはこの点フレキシビリティが大いにある。そこは大いに日本が参考にできる点ではないでしょうか。